

序 文

今年度2010年、私達は平城京遷都から数えて1300年目の記念すべき一年を過ごしました。平城宮跡は4月24日から11月7日までのおよそ半年の間に、内外から363万人の来客を迎えました。折しも完成した第一次大極殿復原建物の威容は、訪れる人々にさまざまな感慨を呼び起こしたことでしょう。1970年に実施した発掘調査によってその姿を現した平城宮第一次大極殿跡の研究成果については、つとに1981年刊行の『平城宮発掘調査報告XI』（学報第40冊）で公にしています。その成果にもとづいて、第一次大極殿建物の復原が進められました。

第一次大極殿は、周囲を築地回廊で囲まれた区画の中に造営されていたことも、すでに明らかにされております。聖武朝の天平12年（740）に都が恭仁京に移されるとともに、この築地回廊の大部分と大極殿は恭仁宮に移建されたことが『続日本紀』に記録されておりますが、平城宮、恭仁宮双方での発掘調査で、そのことが事実であったことが実証されたことは、よく知られています。この回廊で囲まれた第一次大極殿院の南面回廊には南門が開き、その東西に楼阁建物が付設されていました。

本報告書は、先の報告書刊行以後に実施した第一次大極殿院に関わる発掘調査研究の成果をまとめたものであります。平城宮の中核部分については、明治時代に平城京研究の基礎を築いた関野貞以来の重厚な研究の蓄積があります。とりわけ奈良文化財研究所による平城宮跡の継続的な発掘調査が開始された1960年代以来、多くの研究者が解明に取り組んできたものの、ながく共通理解を得るには至っていませんでした。しかし、ことに近年の発掘調査を通じて、いくつかの重要な事実関係が明らかにされたことにより、解明作業は格段に進捗しており、本書ではその研究成果の一端を世に問うものであります。

奈良文化財研究所が平城京、平城宮の発掘調査研究を担うようになって、すでに半世紀を経過しました。その間、少なからぬ成果を積み重ねてきていますが、平城京のモデルとなったと考えられる唐長安城をはじめ、中国や韓国の古代都城の調査の進展や両国の調査研究機関との共同研究を通じて、平城京をは

はじめとするわが国古代都城の歴史の本質に迫るいくつかの新たな議論を、かなり具体的に展開しうる水準に及びつつあると認識しております。それでもまだ未解明の部分あるいは新たに生じた問題点など数多くあり、今後いっそう切磋琢磨し、社会的貢献を十全に果たすべく力を尽くす所存であります。本書に対しても、おおかたの忌憚のないご叱正を賜り、今後とも当研究所にお力添えをお願いする次第であります。

平成23年 3月

独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所
所 長 田 辺 征 夫